

学校编码: 10384

分类号_____密级____

学号: 11320051300328

UDC ____

厦 門 大 学

硕 士 学 位 论 文

女の道

——有吉佐和子の『華岡青洲の妻』を読む

女性的道路

——读有吉佐和子的《华冈青洲之妻》

舒 文 兰

指导教师姓名: 刘晓冷 副教授

专 业 名 称: 日语语言文学

论文提交日期: 2008 年 5 月

论文答辩时间: 年 月

学位授予日期: 年 月

答辩委员会主席: _____

评 阅 人: _____

200 年 月

厦门大学学位论文原创性声明

兹呈交的学位论文，是本人在导师指导下独立完成的研究成果。本人在论文写作中参考的其他个人或集体的研究成果，均在文中以明确方式标明。本人依法享有和承担由此论文产生的权利和责任。

声明人（签名）：

年 月 日

厦门大学学位论文著作权使用声明

本人完全了解厦门大学有关保留、使用学位论文的规定。厦门大学有权保留并向国家主管部门或其指定机构送交论文的纸质版和电子版,有权将学位论文用于非赢利目的的少量复制并允许论文进入学校图书馆被查阅,有权将学位论文的内容编入有关数据库进行检索,有权将学位论文的标题和摘要汇编出版。保密的学位论文在解密后适用本规定。

本学位论文属于

1. 保密 (), 在 年解密后适用本授权书。
2. 不保密 (√)

(请在以上相应括号内打“√”)

作者签名: 日期: 年 月 日

导师签名: _____ 日期: _____ 年 _____ 月 _____ 日

厦门大学博硕士论文摘要库

レジュメ

有吉佐和子(以下は有吉)は、戦後日本の有名な女流作家であり、その作品は多国の言語に翻訳され、国内外で好評を博し、人気作家の一人として幅広い読者層を持っている。その中で、小説『華岡青洲の妻』は第六回女流文学賞を受賞し、有吉の女性運命を描く作品中、重要な作品の一つとなっている。

小説は華岡青洲が麻酔薬の発明を主な手がかりとして書かれた。素材は男が医学における理想を実現した物語であっても、有吉は重きを主役である男の周りの女たちに置き、個性の鮮明なさまざまな女性像を作った。さらに色々な人物の衝突と事件を設定し、虚像の裏に隠された真実をさらけ出して見せた。

それから、『華岡青洲の妻』は有吉が自分なりの結婚生活を味わって、やがてその短い結婚を終わらせてから始めて書いた長編小説である。彼女自身が話したように結婚生活は彼女が旧家を守り受け継ぐ行為に対する態度をすっかり変えた。彼女は「蒼古の家の美に酔う」ことから「それを自ら破壊する側に立」(『作者の自伝』p189-190)つようになり、さらに、それまで続いた家系小説の創作に終止符を打った。結婚、妊娠、出産、離婚など女性の結婚生活における出来事を次々に味わった有吉はその後の作品に、人生を見直す新しい態度が見られるようになった。

これまで、小説『華岡青洲の妻』をめぐって書かれた論評はわずか三つしかない。それらの評論はそれぞれ、小説作法、加恵の性的自覚、女性と男性と家の三者の関係などの角度から小説を検討してきたが、残念なことに、深く立ち入って女の人生とその価値の実現法の研究はなされていなかった。特に於勝と小陸――華岡家の二人の女性についてどれも言及しなかった。『華岡青洲の妻』の女性研究には、未婚の二女性の人生を考えに入れなくては足りないと思う。

本稿では、以上の研究を踏まえ、結婚した女と一生未婚の女のそれぞれの運命を全面的に分析し、有吉の創作意図、体験と結び付けて、女の結婚の意味、人生を生かす道などの面から研究を進める。

本稿の内容は次の如くである。

序論では、先行研究の成果と不足を指摘し、本研究の目的と意義を明示し、研究価値があると思われる点を提出する。本論の第一章では、結婚した於継と加恵の結婚経緯を話し、そして、二女性の関係とその変化の分析に取り組み、結婚した女の人生と価値の実現法を論じる；第二章では、未婚のまま一生を送った二人の妹は運命がどうだったか、そして、女性の運命は女が目でどのように見られていたのかを検討する；第三章では、作者の創作意図とその結婚生活进行分析し、現代女性の結婚観と自己価値の実現法を探る。

最後に、以上の分析と研究をもとに結論的なものを提出し、更に今後の研究方向を展望する。

キーワード：華岡家の女；価値実現；女の道

内容摘要

有吉佐和子（1931—1984）是日本当代著名的女作家，其作品被翻译成多国文字在世界各地出版，深受读者的喜爱。其小说《华冈青洲之妻》曾获第六届女性文学奖，是有吉描写女性命运的一部重要作品。

该小说以华冈青洲的医学试验为线索展开，虽然讲的是男人为实现医学理想奋斗的故事，但作者关注的目光则主要投向了帮助青洲实现理想的女人们。有吉凭借其女性作家独有的敏锐，鲜明地刻画了各种不同的女性形象，并通过巧妙设置故事情节和虚构各种矛盾冲突，揭示出假象背后隐藏的真相。

《华冈青洲之妻》是有吉结束短暂婚姻生活之后创作的第一部长篇小说。正如她自己所言，结婚生活让她对女性在家系传承中所起作用的认识发生了根本性转变，自己慢慢地从“沉溺于传统家庭的苍古之美”转变为“主动站在将其破坏的一侧”（笔者自译）。不仅如此，她之前一直创作的家系小说也在她婚后画上了休止符。在有吉经历了结婚、产子、离婚等一系列事件后创作的这部长篇小说中，我们不难看出作者与以往作品不同的人生思考。作者的注意并没有停留在揭露女性悲惨处境上，更提出女性自身也有问题。

迄今为止，对于《华冈青洲之妻》这部作品的研究为数不多，相关的研究论文仅有3篇。这些论文分别从小说的创作手法，加惠自我觉醒过程和男人、女人与家三者关系的角度对小说进行了研究。遗憾的是，对女性的人生及价值实现方式的探讨不够深入，特别是未有提及华冈家的另外两位女性——一生未婚的于胜和小陆。本论文试图在前人研究的基础上，对华冈家已婚和未婚女性的人生分别进行分析研究，并结合作者的创作意图和亲身体验找出女性自身的问题，以弥补该方面研究的不足。

本文的结构与主要内容如下：

序章，主要是总结已有的研究成果，指出其不足之处，并在此基础上阐述本论文的目的，提出值得进一步研究的问题点。本论第一章，介绍于继和加惠的结婚原委，并通过剖析两人的关系及变化，探讨已婚女性的人生及价值实现方式；第二章，把焦点对向一生未婚的于胜和小陆，通过深入分析她们的人生及其对女性命运的认识来探讨一生未婚女性的命运；第三章，结合作者的创作意图以及其自身经历，从正反两个方面阐述女性自身的局限和自强之路。

最后，总结上文得出结论，同时提出今后的研究方向。

关键词：华冈家的女人；价值实现；女性的道路

厦门大学博士论文摘要库

目 次	
序 論.....	1
1. 1 作家と作品の紹介	1
1. 2 先行研究と問題意識	3
本 論.....	5
第一章 結婚した女	7
1. 1 結婚の経緯.....	7
1. 2 於継と加恵の関係.....	10
1. 2. 1 師匠と弟子	11
1. 2. 2 ライバルへの急転.....	15
第二章 一生未婚の女	21
2. 1 於勝と小陸の運命.....	21
2. 1. 1 二人の姿	21
2. 1. 2 未婚の原因	22
2. 1. 3 二人の人生	23
2. 2 女を見る女が目.....	25
第三章 女の道	29
3. 1 理想の虚像.....	29
3. 2 有吉の道.....	32
結 論.....	35
参考文献.....	37
謝 辞.....	39

目 录

序论	1
1. 1 作家和作品介绍	1
1. 2 已有研究成果与选题	3
本论	5
第一章 已婚的女人	7
1. 1 于继和加惠的结婚始末	7
1. 2 于继和加惠的关系	10
1. 2. 1 师傅与弟子	11
1. 2. 2 婆媳与对手	15
第二章 未婚的女人	21
2. 1 于胜和小陆的人生经历	21
2. 1. 1 二人的形象	21
2. 1. 2 未婚的理由	22
2. 1. 3 二人的人生	23
2. 2 女人眼中的女人	25
第三章 女性的道路	29
3. 1 理想的表象背后	29
3. 2 有吉的人生道路	32
结论	35
参考文献	37
致謝	39

序 論

1. 1 作家と作品の紹介

有吉佐和子(以下は有吉)は、戦後日本の有名な女流作家である。彼女は世間の注目を浴び、マスコミから曾野綾子、山崎豊子とならぶ「才女」ともてはやされた。有吉の作品は多国の言語に翻訳され、国内外で好評を博し、人気作家の一人として幅広い読者層を持っている。

有吉は1931年、和歌山市に生まれ、1952年芥川賞候補となった小説『地唄』によって文壇にデビューした。それから二十年の間、有吉は創作を中断することなく続けていた。その作品は数が多いばかりでなく、題材も豊富多彩であり、社会問題、伝統芸能、家庭問題などの分野に涉っている。有吉は創作の道では疲れなど知らない探求者であり、彼女自身の言葉を借りて言えば「レッテルを貼られるとすぐはがしたくなってしまう性分な」(『作家の自伝』p 212)のである。

有吉氏の作家的成熟は『地唄』(1956)、『紀ノ川』(1959)、『香華』(1961)『非色』(1963)『華岡青洲の妻』(1967)『恍惚の人』(1973)、『複合汚染』(1975)、『和宮様御留』(1978)といった作品創造にたどることができた。その作品の多くは女性が主役であり、女の運命を主題とする有吉文学の一脈を形成した。

有吉の老人問題、公害問題などの作品に比べて、筆者は女性の運命を描いた作品のほうに興味があり、特に実在したものごとに基づいて書かれた小説『華岡青洲の妻』により関心が寄せられる。その小説は1967年2月に発行されるとまもなく舞台化され、何千回も上演され、大きな反響を呼んだ。更に、第六回女流文学賞を受賞し、有吉の女性の運命を描く作品中、重要な作品の一つとなっている。

小説は華岡青洲の麻酔薬の発明を主な手がかりとして書かれた。今日のわれわれは多少なりとも麻酔薬に恵まれていても、その発明者のことは殆ど知らない。青洲の名は医学関係者の間でしか知られず、その名前が一般人に広く知

られるようになったのは、有吉の小説のおかげだと言えよう。そして、小説には『乳癌治療録』、杉田玄伯の書簡などをそのまま引用した部分があるためか、殆どの読者はそれを事実だと誤解しているそうである。しかし、資料を調べたところ、有吉が呉の著書の『華岡青洲先生及其外科』¹に基づいて書いたことは明らかである。有吉の『華岡青洲の妻』は材料はすべてそれを枠として書かれ、小説には伝記をそのまま引用したところがあれば、作者の考えに合わせて調整して引用したところもある。だから実は小説にはかなりの虚構が混じっている。

わが国の有名な日本文学の研究者である李徳純氏は有吉の作品に関する評論で「小説感がある小説の一番大切なのは何を述べたかではなく、どのようにストーリーを展開させ、どのように登場人物を描き、特にどのように筋をうまくまとめるかということにある。女流作家はこの面において特に優れたところがある。有吉は彼女なりの優れた構想と才気を有し、複雑で繊細な心理描写に長じ、それぞれ異なった人物像を作りあげた」(『天涯涕泪一身遥』p 63)と述べた。小説『華岡青洲の妻』にもその点が見られ、作者はたくさんの登場人物の関係上に、様々な架空のストーリーを作り、特色のある人物像を描出した。日本の文学研究者武田友寿氏が述べた通り、『華岡青洲の妻』は厚重的構成をもつ作品である(『華岡青洲の妻』(解説))。素材は男が医学における理想を実現した物語であっても、有吉は重きを主役である男の周りの女たちに置き、女たちの間柄と男女の間柄に注目し、特に登場した女たちの内なる世界に立ち入って繊細なところまでさらけ出して見せた。小説『華岡青洲の妻』は作者が豊富な感受性を生かして女たちの一生を主題として書いた作品である。

では、小説の創作背景を見よう。有吉は自分なりの結婚生活を味わって、やがてその短い結婚を終わらせてから『華岡青洲の妻』を書いた。だから、小説には作者の結婚生活の経験が含まれているのではないかという疑問を持たないわけにはいかないのである。

¹ 『華岡青洲先生及其外科』 華岡青洲は世界最初の全身麻酔による乳癌手術成功者として、世界医学への偉大な貢献によって歴史に名を遺した。これは東京帝国大学の著名な教授、医学史家呉秀三が書いた華岡青洲の伝記であり、詳しく麻酔薬の発明の過程を紹介しただけではなく、青洲の成長経歴及び医学の成就も書いた。青洲に関するわずかな著書のなかでは、呉著は最も権威があるものと見られる。

時代がいくら変わっても、結婚と家はどんなものであろうか、どのように人生を生かすかは、女性にとって直面しなければならない課題である。今日においても、自分の価値を見失ったままつらい人生を終える女性の数が少なくない。小説に登場した女性の人生に分析を加え、その答えを探することは現実的意義を有し、近代女性の人生指導の参考にもなるのではないかと思う。

1. 2 先行研究と問題意識

これまでの有吉の『華岡青洲の妻』に関する研究といえば、数が少なく、日本においては：①大本泉の『華岡青洲の妻』（有吉佐和子）一女の性の中で行われるアイデンティティの確立（1987、10巻『解釈と鑑賞』）②須浪敏子の『華岡青洲の妻論—物語的要素の分析を中心に—』（1985、12・61巻『四国学院大学論集』）の二種がある；中国においては、胡永紅の『女性、家庭、男性——『華岡青洲の妻』から見る三者の関係』（2006、10・『翻译与文化 厦门大学出版社』）の一篇しかない。

以上の評論はそれなりの面から小説を検討してきたが、概略すれば、①は結婚後、少女から成熟な女へ変わった加恵が性で自分の立場を確立した過程に注目した；②は小説の面白さは、伝記物の見方と写実物の見方の対立的二重性から来、つまり、一つの史実を対立的二観点の交差によって遠近法的に再構成する小説作法に、この小説の最大の魅力があると指摘し、物語の手法に力点を置きながら、二つの観点の対立効果を詳しく述べた。小説の作法に重点を置き論じたものである；③は女と男の関係を検討し、家は男が女を圧迫する場所を提供し、女がそうした自分の状況を変えようとするなら、家を出るしかないとの結論を出した。以上の論評はどれも結婚による女と女、男と女の間柄に手を加え、結婚が女に対する意義を立ち入って論じることがしなかった。そして、華岡家の二人の女性——於勝と小陸の人生に触れず、結婚している於継と加恵のことを主として論じてきた。『華岡青洲の妻』の女性研究には、未婚の二女性の人生を考えに入れなくては足りないと思う。

そこで、本論では、以上の研究を踏まえ、結婚した女と一生未婚の女のそれ

ぞれの運命を全面的に分析し、有吉の自己体験と結び付けて、女の結婚の意味、価値実現の道などの面から検討してみたい。

本論文の内容は次の如くである。

序論では、先行研究を並べ、その他に研究価値があると思われる点を提出する。

本論は下記の三部分に分けて論じる。

第一章では、結婚した於継と加恵の結婚経緯を話し、そして、二女性の関係とその変化を分析する。

第二章では、未婚のまま一生を送った二人の妹はどのような運命をたどったか、そして、女性の運命を女の手でどのように見ていたのか、検討する。

第三章では、有吉自身の結婚生活を分析し、現代女性の結婚観と自己価値の実現法を探る。

最後に、以上の分析と研究をもとに結論的なものを出し、更に今後の研究方向を展望する。

本 論

『華岡青洲の妻』の粗筋は次の通りである。

華岡青洲の妻加恵は、八歳の時に噂に聞いた於継の美しさをかいま見、その姿に魅せられ、その於継に息子の嫁にと見込まれたとき、未来を拓いてくれる来迎の菩薩の訪れと思うほどの喜びで、於継を慕って嫁入りした。夫になる青洲については、以前に話を聞いてはいても、心を動かされるどころか関心もなかった。嫁入りのときでさえ、当の花嫁は京都に修学中で不在であった。結婚が家同士のあいだで行われた江戸時代であっても、花婿不在のところへの嫁入りは異例であろう。しかし、花婿不在の三年間のあいだ於継と加恵のあいだには、というより加恵には於継に対する思慕と一体感があった。だがこのことは、青洲の帰宅によって始まった姑と嫁の敵対関係をより鮮やかに浮き立たせている。姑と小姑に無視された加恵は、於継に対する憎悪を自覚する。そして、女が家に入ることの難しさを始めて思い知らされた。しかし、加恵は絶望していなかった。それどころか、それまで一途に敬愛していた於継に闘志を沸き立たせていた。こうしてその結果戦いの中で、加恵は身ごもって娘を産み、また娘に死なれ、姑に対する感情も反復していた。二人は、子として夫としての青洲を独占すべく、所謂嫁姑の争いをくりひろげ、ついには、青洲が研究していた麻酔の人体実験台になることも奪い合うようになった。加恵は激しい薬を飲んでめくらになったが、姑の於継に勝ち、その勝利は於継の死後華岡家に後継ぎの息子を産んだことによって最後まで続いた。青洲の妹たちは一生独身で華岡家を支え、最後に二人とも不治の病気で死んだ。

これまで麻酔薬に関する史料は、すべて男の筆者によって記録され、女たちがその発明にどんなに大きな役割を果たしたとしても、その姿は隠されていた。しかし、小説『華岡青洲の妻』では、作者は女性であり、男性よりは男の周りの女たちに注意が向けられていた。小説に登場した女たちは同じ家に閉じこめられて生活していた女であるが、それぞれの運命を辿った。本稿では、華岡家の既婚女性と未婚女性のそれぞれの運命を分析し、結婚とその家庭が女にどう

いう影響を与えたか、女にとって、自分の人生をよく生かすための道は何なのかを検討してみる。

厦门大学博士论文摘要库

Degree papers are in the "[Xiamen University Electronic Theses and Dissertations Database](#)". Full texts are available in the following ways:

1. If your library is a CALIS member libraries, please log on <http://etd.calis.edu.cn/> and submit requests online, or consult the interlibrary loan department in your library.
2. For users of non-CALIS member libraries, please mail to etd@xmu.edu.cn for delivery details.

厦门大学博硕士论文摘要库